

たくみ

Craftsmanship

特集 芹沢銈介型染作品展
 特集 野村朋香作陶展
 追悼 島岡達三先生

第37号

アイヌ民族の伝承文化

新春の一月十四日、青山のドイツ文化会館で「小シールボルトとアイヌ」「岡村吉右衛門と型染絵蝦夷シリーズ」と題する展覧会が開かれた。小シールボルトはハイリツヒといい、幕末に来日して日欧文化の交流に力を尽くしたフランツ・フォン・シールボルトの息子である。父にならって東洋文化の研究、とくにアイヌ民族の歴史と文化の調査研究にすぐれた業績をのこした。今年はその没後百年という。

岡村さんの蝦夷絵の展観はそれに併せたものだが、蝦夷絵というジャンルは岡村氏独自のもので、アイヌの伝承に生きた固有の文化の精神性を見事に描いている。民藝館の周辺では意外と知られていないが、氏の晩年に、アイヌ民族博物館、多摩美術大学美術館、王子・紙の博物館などで展観された。氏の代表作といえる文字絵シリーズや型染絵本とともに、もつと高い評価があつていいと思う。

かつて日本民藝館展にも岡村さんの斡旋でアイヌの蒲の花苳(チタラベ)が出品され、価格の高いことからその是非を問われたことがあつた。また昨年十二月十八日に行われた十九年度全国伝統的工芸品公募展の審査会で、アイヌの樹皮の衣装(アットウシ)が議論の対象になつた。伝工品産業の指定外であることや、日用品ではなく儀礼用の衣の復元ではないかとの意見があつた。しかしもう一点の木綿着(ルウンベ)とともに、その高い技と伝承の造形美が認められ賞の対象となつた。

平成九年、「北海道旧土人保護法」が廃止され、新たに「アイヌ文化振興法」が制定された。実に近年まで「旧土人」と蔑称された悪法を廃するため多くの先人が生命を賭し、そして今アイヌ民族の精神的自立のために、伝承儀礼用のチタラベやアットウシを織るのである。私たちが見習うべき何かがあるのではないだろうか。

(志賀直邦)

たくみ特別展

芹沢銈介型染作品展

— 日常の生活デザインを中心に —

会期 平成二十年三月二十九日(土)～四月十日(木)

三月三十日(日)、四月六日(日)は営業いたしません。

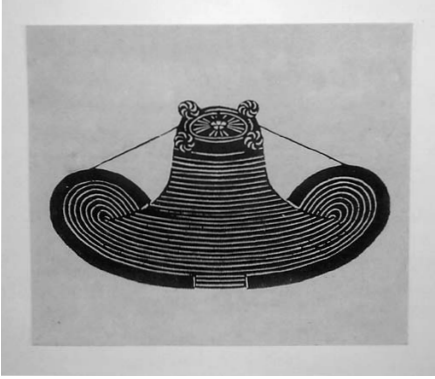
会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

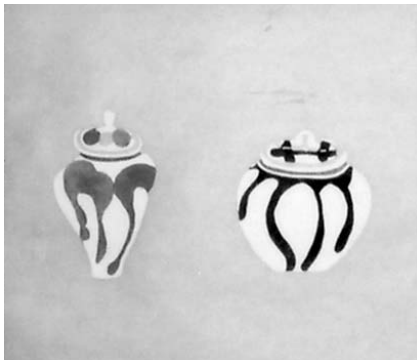
(日祝日・最終日は十七時半まで)

展示販売の品目

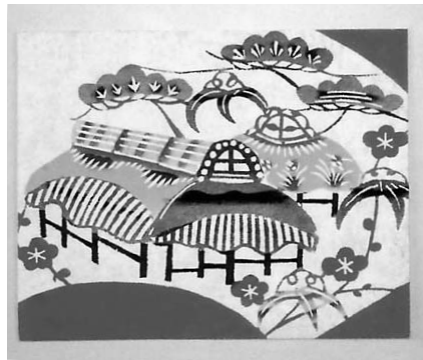
縮緬^{ちりめん}地着尺(登窯文)、着物仕立(落葉文)、屏風(極楽から来た図)ほか、額装(法然上人図、梵字、文字絵、型染絵)、軸装掛物(いろいろ)、のれん、板絵、肉筆下絵(志ま亀京都店図)、限定本物語絵集、「十三妹」(六十四図、桐箱入)、「妙好人因幡の源左」(二十六図、漆塗箱入)、「沖繩風物」(折本仕立、漆塗箱入)、芹沢銈介全集、作品集、図録、他。



津軽バオリ笠



掛軸 小壺の図



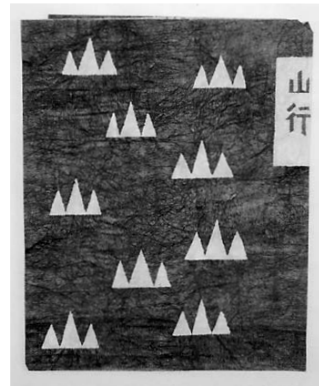
型染絵 田舎家



肉筆 下絵「東寺夜叉神像」



絵文字 天



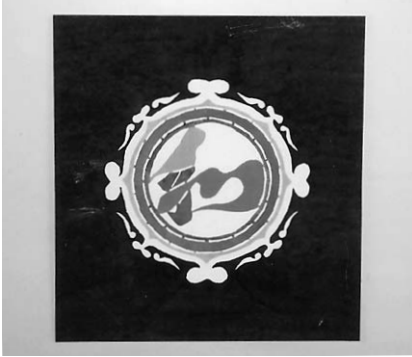
山行(装丁)



囲炉裏端



侍たち



和の字



型染絵 益子窯



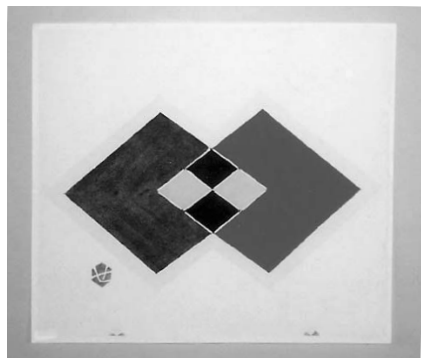
うちわ絵 赤マンマ



型染絵 土湯こけし



沖縄張子図



型染絵 菱文



肉筆 松島図



椅子に猫



小品 アフリカの仮面



額装 梵字



掛軸 法然山を出づ



紙漉き図



紙漉き村

芹沢銈介の生活デザインと数ものの仕事について

志賀 直邦

いま静岡の市立芹沢銈介美術館で、「芹沢銈介の生活デザイン」と題する展覧会が開かれている。(五月十八日まで)

芹沢の生涯の芸業は、そのほとんどすべてが日常の生活にかかわるものばかりである。それでいながらその表現がすべて生き活きとして獨創性にあふれている。今回の静岡での「芹沢銈介の生活デザイン」展は、そういった芹沢の魅力を充分に見せてくれている。

芹沢銈介は静岡に生まれ、幼少時から図画手工が好きで洋画塾に通ってデッサンを習っていたという。大正五年(一九一六)、東京高等工業(今の東京工大)図案科を卒業して、まもなく静岡県立工業試験場に勤めたが、その頃のことを晩年、芹沢たよ夫人はこう語っている。

「結婚して始めの頃は、朝御飯を頂くと自転車で出掛けて写生ばかりしていましたね。その頃に写生したのはすごい量でした。積み上げるとこんなに、一メートル以上も。それ、みんな戦災で焼かれてしまいました。惜しいございますねえ。」(芹沢銈介全集月報)

芹沢の永年にわたる同志であり、静岡時代や戦災のあとの困難な時代に近隣にあった柳悦孝(女子美大学長)も、芹沢が常に、手元にあるチラシやポスターの裏なども利用して写生、デッサンをしていたと語っている。

このように芹沢は一生において恐らく何万枚となく写生をし、それがいつでも新たな作品の創作に、泉となつて湧いて出たのだと思う。彼の作品は着物や帯、屏風、のれんから絵曆、うち

わ、扇子、装丁など多岐にわたるが、そのすべてが大小にかかわらず、事物への的確な観察力と基本に立った表現力に裏づけされているのである。

それとともに、芹沢の制作活動の核となつたのが、型紙を用いた合羽摺かつぼすりと型絵染の技法だったことも特筆される。芹沢は初期にはローケツ染なども試みたが、昭和三年(一九二八)、柳宗悦たち民藝同人の蒐集による沖繩の紅びん型の風呂敷(うちくい)に触れ、その美しさに強い衝撃を受けたという。

そして柳との親交の中で彼は、昭和六年一月創刊の、柳の責任編集による雑誌「工藝」の表紙の装丁を受けもつことになる。毎年五百部余り、厚地の手織木綿に型染した装丁の仕事は並たいていの苦勞ではなかったであろう。

このあと昭和十一年頃から、芹沢は合羽摺の物語絵本を次々と発表する。その第一作「和そめ絵がたり」(十六図、一六五部)に寄せて柳宗悦は次のように書いた。「和染の染方を絵解き



うちわ 三柄

した本であるが、絵や字を型紙で刷り、これに丹緑を手差しした美しい本である。寛文（江戸前期末）以降この種の差色絵入本として、これ程のものは決してないと思う。」

芹沢はさらに「絵本どんきほうて」（三十二図、七五部）、「法然上人絵伝」（六十四図、一〇〇部）を発表する。これらの作品は和紙に手染めした絵本であって、「和染く」が合計二六四〇枚、

「どんきほうて」が二四〇〇枚、「法然上人」にいたってはじつに六四〇〇枚もの膨大な仕事であった。芹沢の創作活動が、その当初から一点主義ではなく、「数」を意識したものであることがわかる。

第二次大戦後の昭和二十年秋、芹沢は早くも和紙を用いた十二ヶ月組の型染カレンダーの制作に取りかかる。これはたくみの発案といわれるが、戦後の復興期にあつて軍国主義の悪夢から解放された日本人にとって、万国共通の七曜表は自由の象徴でもあったのだろうか。二十一年度版の発売当初から内外に好評を博し、じつに三十八年間にわたつて作りつづけられた。

この絵暦をはじめギフトカード、うちわ、扇子、卓布などの新作品が人気を呼ぶにつれ、制作体制の整備が望まれ、昭和三十年に東京蒲田の自邸内に工房として「芹沢染紙研究所」が発足し、ここに若い弟子や工人たちとの協業の仕事による、生活デザイン的作品

の量産が軌道に乗ることとなった。

ここで注意しなければならないことは、芹沢が量産の作品であろうと、いかなる小品であっても常に創意と工夫を怠らず、また人まかせにしなかったことである。下絵、型紙彫り、何通りもの型染めの試作など、すべて芹沢自らの手によつた。

芹沢銈介にとつて、屏風や着物などの大作であれ、数ものの小品であれ、そのデザインと制作の喜びは同じであり、さらなる創作の源泉となった。

柳宗悦は、芹沢の模様について、デザイン（下絵）を型紙に彫り直すことによつて、どんなものでも美しい模様生まれかわると書いた。型染という間接的な表現手法に加えて、芹沢の芸業が工房の若い弟子たちとの協業によつて、さらに普遍的で生活的な美しさを兼ねそなえたこと、そこに芹沢の秘密があるように思う。海外でもこんにち、日本の模様と色彩を代表する作家として高く評価される所以である。

追悼 島岡達三先生

志賀 直邦

私たちが心から敬愛申し上げていた陶芸家島岡達三先生が、昨年末の十二月十一日に逝去された。奇しくも銀座松屋での個展の最終日であった。

島岡先生はたくみとも縁が深く、永いお付き合いであったが、濱田庄司先生が昭和五十三年の初めに亡くなられたあと、そのあとを継いでたくみの社外取締役になつていただいていた。

先生はその頃から日本民藝館や日本民藝協会の理事も兼任され、作陶活動のかたわら数多くある会議や集会にも出席され、民藝運動に関する助言者として多くの人たちに信頼されていた。

島岡先生は気さくなお人柄であったが厳しいときは厳しく、そして常に公正であった。私にとつては生涯の師で

あり、偉大な兄でもあった。何事につけ私は先生の意見、判断を尊重した。

先生は戦後の二十一年、復員するとまっすぐ益子に行き、濱田庄司の門に入ったという。そのあとの独立してからのことをある文にこう書かれている。自分は「あくまでも使える焼物を主眼として、個人の仕事ではなく、職人達と一緒に仕事を念願とした。その間いつも頭を離れなかつたことは、自分の立場についてであった。いろいろ悩んだ末に到達した結論は、集団の指導者として、意識しつつ職人達に良い手本を与えること、彼らが正しい仕事が出来る環境を維持することが自分の仕事と考えた。」(「現代の陶芸」付録)

島岡先生の縄文象嵌の作風もそうだが、氏はそのことについて、柳宗悦先生の民藝美論のお蔭だ、と語っている。今はただ心から「冥福を祈るばかりである。

友人と歓談の島岡先生(中央)



たくみ企画展 益子島岡窯卒業展 野村朋香作陶展

会期 平成二十年四月二十六日(土)～五月一日(木)

四月二十七日(日)、二十九日(火・昭和の日)は

営業いたします。

会場 銀座たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで

(日祝日・最終日は十七時半まで)



工房の野村朋香さん

ごあいさつ

六古窯の一つである瀬戸で絵付けを学び、益子では人間国宝島岡達三氏の下で民芸「用の美」としての器作りを学びました。

細かな作業と絵付けを得意とし、呉須や鉄絵を駆使した器作りに取り組みました。

陶芸への探究心は尽きることがなく、日々学んでおります。

野村朋香

■陶歴■

昭和50年 東京に生まれる

平成9年 日本大学芸術学部美術学科

卒業

平成13年 愛知県立窯業高等学校技術

専門学校卒業

平成14年 金津創作の森第2回酒の

器展入選

平成15年 益子の島岡達三氏の門に入

る

平成20年 茨城県鹿嶋市に独立築窯



地釉夫婦飯碗

新刊紹介

井上泰秋作陶五十周年記念

『土と語り、
火とかたる』

井上泰秋さんは熊本の小代焼しよくだいを代表する窯元だが、このたびその作陶五十周年を記念して表題の作品集を上梓された。初期から今日までの作品百十余点の図版に加えて、昨年十一月七日か



ら四十数回にわたって熊本日日新聞に連載された「小岱山のふもとから」と題する半生記を付している。

大牟田市の近くの農村に五男三女の四男坊として生れた井上さんは、縁あつて十五歳のとき県工業試験場の窯業部に練習生として入所する。このあとの彼の修業の足どりについて、半生記の中見出しからみてみよう。

『学校』だった県工業試験場」「京焼の大家のもとに弟子入り」「徒弟制



上 井上泰秋さん
下 ワラ白蒔釉流し花文皿

度の窯元で下積み生活」「俺は焼き物が好いとる」「習うよりは慣れろ」「肥後焼」の看板を掲げた」「二日五八〇個焼いた」「外村館長はひぎをたたき喜んだ」「小岱山のふもとに行こう」「十年目の節目に登り窯を築く」「七人の弟子が独立」「陛下からの大皿のご注文」「父が残した『強く正しく生きよ』」「たかが湯呑み、されど湯呑み」。など。

これらからも井上さんの、前向きで、誰からも好かれる人柄、工人としての天性の資質や、成長のきつかけを逃さない勘の良さなどを知ることができる。

図版もなかなか見ごたえがあつて、井上泰秋さんの五十年の陶業が、大皿、花生、壺、茶器から日用の食器まで、優品が紹介されてくり返し眺めても見飽きしない。また小代焼の解説書としても格好のものと思う。ぜひおすすめてほしい一冊である。(S)

熊本日日新聞社発行 二六〇〇円

キトウシ

三浦 正宏

春の楽しみの一つに山菜料理がある。最近はずみやシドケなどいっしょにギョウジャニンニクも出回るようになり、楽しみがふえた。

ギョウジャニンニクは東北ではあまりなじみがないが、北海道の人やそこで暮らしたことがある人にとっては身近な山菜である。アイヌの人たちにとっては食料としてだけでなく、病気の神を追い払うまじないに使われるなど、古くから特別なものであった。

アイヌ語でギョウジャニンニクを「キト」、群生していることを「ウシ」という。北海道十勝足寄町の喜登牛、釧路の来止峠、礼文島の起登白などの地名は、アイヌの人たちがギョウジャニンニクの群生地を呼んだ「キトウシ」という発音に、後から移り住んだ和人がそれぞれの漢字を当てたもので

ある。北海道に和人が入り始めたのは鎌倉時代といわれるが、そのころ使われていたアイヌ語の地名が、奇妙な当て字にはなつたが現在まで残り、それが暮らしの情報として今も生きつづけていることには驚くばかりである。

秋田県にもギョウジャニンニクを呼んだアイヌ語起源と思われる地名がある。旧合川町の木戸石や旧山本町の木戸ノ沢、秋田市太平の木曽石も、わたしの耳にはアイヌ語でキト・ウシ(ギョウジャニンニクの・群生地)と聞こえる。

そのむかし、北東北にはアイヌ語を使う人たちが住んでいた。狩猟、採取の暮らしのなかで、ギョウジャニンニクは大切な食料であったから、その群生地はキト・ウシ(ギョウジャニンニクの・群生地)と呼ばれていたのである

う。このアイヌ語の発音を正確に表記すればローマ字で「k i t o ・ u s ・ i」である。秋田に移り住んだ和人の耳にはこのアイヌ語の発音は「キソイシ」と聞こえ、それに「木曽石」という漢字を当てたのである。

この地名が気になっていたわたしは、土地の人たちに「この山にギョウジャニンニクはあるか」をたずねたことがあった。しかし、「食べたことがない」、「どんな葉っぱか分からない」と、期待していた答えはなかった。

ギョウジャニンニクはキトピロやアイヌネギとも呼ばれるように、ニンニクのようなネギのような、それでいて清涼で上品な味わいである。わたしがはじめて食べたのは、北海道平取町のドライプインで食べたキトピロラーメンというラーメンの具だった。コシユウの効いた油いためのギョウジャニンニクが、濃厚な味噌ラーメンにのつていた。

(いわな文芸会員・秋田市)

たくみ歳時記 天神人形



天神人形(秋田県八橋人形)

日本の郷土玩具の中で、どここの産地でも作られているものの一つに、天神人形がある。天神は学問の神として親しまれた菅原道真の像であり、また農耕の神としての信仰の象徴でもある。天神人形の作りは、土人形、練り物、木彫、張り子など。形は正座のもの、立ち姿のもの、牛に乗ったもの、お堂

に入ったものなど。各地で郷土色豊かなさまざまな天神が作られている。

秋田県の八橋人形でも、六種類の天神が作られている。型は百年前の素焼きの型を使い、絵付けには顔料と二カワが使われている。この地区には、男子が生まれた家では天神を買い求める風習がある。四月二十五日の八橋菅原神社の例祭日、家々では天神、右大臣左大臣、唐獅子、石灯ろうの段飾りを飾って、男子の成長をお祝いする。(M)



石灯ろうと唐獅子(同)

あとがき

アイヌ民族とその文化については幕末の頃から欧米でも関心もたれ、明治初年にはH・シーボルトやチエンバレンなどすぐれた研究者が出た。ほかにも女性の旅行家イザベラ・バードの「日本輿地紀行」(明治十三年・一八八〇刊)は先駆的なものとして知られる。

バードが明治十一年、ピラトリという部落に泊ったとき、温かいもてなしの宿賃を受け取らず、求めた煙草入や彫刻を施した小刀の代金も僅かな金しか受け取ろうとしなかった。もうけるのは「アイヌの慣わし」ではない、と言ったという。森羅万象に霊の存在を認め、神と自然に逆らうことのなかったアイヌの精神文化が、幕末、明治維新の逆境の中でも健全であったことをバード女史は記している。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一
二 発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇一―二三五六五九

定価 六〇円(税込)